3 おとうさんのなし

ぼくのいえは、むかしからなしをつくっています。内牧の土はおいしいくだものや作物がさいばいできるのだそうです。

ぼくのおとうさんは、一年中、まい日なしの木をしんぱいしています。たとえば、はる、つよいかぜやひょうなどからなしのめと花をまもるために、あみをかけます。天気のいい日には、なしの花一つ一つに花ふんをつけます。

「大きなみをつけてよ。」

と、こえをかけているときもあります。

なつになり、みがなると、ふくろをかぶせます。なしのせわがいそがしいので、休みの日はありません。ぼくは、日よう日はおとうさんのかいしゃが休みになる友だちがうらやましくなるときもあります。

（おとうさんといっしょにあそびにいきたいのになあ。）

そして、ぼくの手つだいは、おちたなしをひろうしごとです。たくさんのなしをかごに入れてはこぶと手のひらがまっ赤になっていたくなってしまいます。

（おとうさんは、どうしてこんなにたいへんなしごとをするのだろう。）

なしがいろづきはじめるころ、おとうさんはすこしねつを出してしまいました。でも、おとうさんは、ゆっくりとねていないで、なしの木を見にいきました。

ぼくはしんぱいになって、

「おとうさん、ちゃんとねていないとだめだよ。」

と、こえをかけました。

すると、

「なしの木はまい日ちゃんと見て、せわをしないといけないんだよ。おいしい、あまいなしをつくるためには、一日も見のがすわけには、いかないんだ。」

と、おとうさんがいいました。そういえば、いままで、おとうさんがぐあいがわるくてねていたことはありませんでした。

（おとうさんは、ほんとうにおいしいなしをつくろうとしているんだ。）

おとうさんのつくったなしがみのり、おきゃくさんがかいにきました。とおくから、きてくれたそうです。

「あまいねえ。春日部のくだものはおいしいので、ことしもかいにきましたよ。」

おとうさんを見るとうれしそうでした。

「おとうさん、ぼくもなしをつくるしごとを、もっともっと手つだうよ。」

と、からだに力をこめていいました。おとうさんはぼくのかたをポンとたたきました。あきかぜが気もちよくふいていきました。